

## 佐地 勉教授送別の辞

小原 明

東邦大学医学部小児科学講座（大森）教授

佐地 勉教授が、平成 28 年 3 月末をもって東邦大学医学部小児科学講座（大森）教授を定年退職されます。38 年間にわたる東邦大学医学部教員、19 年間教授職としてご活躍になり、めでたく定年を迎えられたことを心からお祝い申し上げますと共に、教室を代表して感謝の意を申し述べます。

佐地先生は昭和 51 年に東邦大学医学部を卒業されました。学生時代から飛び抜けて優秀な先輩でした。当時の小児科学教室は中山健太郎教授の厳しい教育で有名でしたが、その中山先生も佐地先生を高く評価されて、入局早々から先生を学生教育担当に指名していました。そのような背景で私共学生はこの時から佐地先生に小児科学の指導を受けることになり、その後 40 年が経過しました。

佐地先生は入局 2 年目の昭和 52 年、東京女子医科大学日本心臓血圧研究所（高尾篤良教授）に勉強に出て小児循環器病学の研鑽を開始されました。当時の“中山小児科”は、中山教授が血液学、青木継稔先生が神経学、矢田純一先生が免疫学をそれぞれ指導されていました。教室に錚々たる指導者がいながら佐地先生はそれらの先生の分野は選ばず、小児循環器病学を選択されています。教室内に指導者のいないまさにフロンティア、相当な実力と自信、実行力とビジョンがなければできないことです。先生は期待に応じて実力をつけ診療を展開し、学外との学术交流を深めながら“東邦大森の小児循環器”診療を軌道に乗せました。その後、松尾準雄先生を教授に迎え、小児循環器外科には高梨吉則教授が赴任されて大森病院では活発な小児循環器の臨床が展開され、多くの教室員が育ちました。

“東邦大森の小児循環器”を軌道に乗せながら、佐地先生はご自身の中心課題を先天性心疾患ではなく血管や心筋に据えています。心筋症や心筋炎、血管炎としての川崎病、肺高血圧症への取り組みは小児循環器領域を越えて内科循環器、病理や免疫学、分子生物学の基礎医学分野におよび、先生の活躍の舞台は自ずと拡がりました。

佐地先生は臨床場面で先端の医療を常に全力で目指していました。完全大血管転位症の乳児に balloon atrial

septostomy (BAS) (バルーンカテーテルを用いた心房中隔裂開術)を行ったのは入局 2 年目の昭和 53 年のこと、カテーテル治療のはしりでした。昭和 54 年には劇症心筋炎による房室弁腱索断裂を早期に積極的に診断して弁置換術に繋げています。原発性肺高血圧症の患者さんに米国での生体肺移植治療を実現し、その後小児の臓器移植に積極的に発言されるようになりました。またエポプロステノロールによる肺高血圧症の治療を小児に対して早期から取り組まれたこともすばらしいご業績で、患者さん思いの篤い治療が私共には印象的です。川崎病に対する思い入れはまた格別なものがあり、病理病態から治療まで多くの論文を発表され、臨床試験を実行されてきました。その御業績は Nature Genetics や Lancet, The American Journal of Cardiology, American Heart Journal など一流紙に掲載され多数引用されています。

これまで述べたように循環器領域で活躍されていた先生ですが、小児科一般や、循環器以外の小児専門分野へのご関心は常に高く、特に呼吸器、感染症、免疫、小児薬理学などに興味がおありでした。その結果小児科学会内での交友関係も広く学会活動も活発で、第 114 回日本小児科学会学術集会（平成 23 年）の会頭をお務めになっています。教室内の指導では中山教授の直系を感じさせる厳しさで、循環器以外の診療分野でも高い要求と鋭い質問に教室員は常に緊張していました。先生独特の高級なウイットや痛烈な皮肉に私共はしばしばたじろぎましたが、きちんとフォロー頂きましたので救われました。同様に、臨床実習学生に対する厳しい試問でも、最後に学生を笑わせて楽しい雰囲気ですべて終了させていたご様子に、佐地先生本来の優しさを垣間見ました。

先生のご活躍の紹介はつきませんが、定年に際し教室員から長年のご指導に感謝申し上げますとともに、先生の今後の診療、研究のますますのご活躍をお祈りして送別の辞とさせていただきます。本当にありがとうございました。